

報告

折口信夫旧蔵受取書簡について

— ニコライ・ネフスキーと彼を取り巻く人々 —

松本 博明\*

一 折口信夫旧蔵民俗資料について

折口信夫には、彼が筆記したあるいは収集した未整理、未解説の各種資料が大量に残されている（以下折口信夫旧蔵資料。國學院大學折口博士記念古代研究所蔵）。「折口信夫旧蔵資料」は、大きく分けて

(i) 自筆原稿を含めた原稿資料約二五〇点（断片等も含む）。

(ii) 同時代（大正初年から昭和二十八年までの）の作家、詩人、歌人、さらには近代文学者、民俗学者、各学術団体、弟子、出版社などからの受取書簡一万二千点以上。

(iii) 手帖・小型ノートなどの手控え資料三四〇点。

(iv) 年譜関連資料。

(v) 収集コレクション。

(vi) 折口文庫（旧蔵の図書・雑誌）とに大別される。

筆者は、新版『折口信夫全集』（一九九五年～一九九九年、別巻4写真集を残して完結。中央公論新社）刊行に関わって、草稿資料を含む一部資料の整理と翻刻を行い、その成果の多くは当該全集に新資料として収録された。

それぞれの資料群については、全集編纂の過程で筆者が応分の整理を行ってきたが、しかしその後筆者が当該研究所の職を離れて以後、現在に至るまでこれら多くの資料は整理・解説をなされないまま、ほとんど手つかずの状態にある。

「折口信夫旧蔵資料」を、その学問的営為の内実から仮に

- (1) 文学研究領域およびその裏打ちとなるべき創作領域
- (2) 民俗学、宗教学研究領域

\* 国際文化学科

の二つに便宜上分けて説明しよう。もちろん折口信夫の研究創作分野は、このような分類を拒むくらい連携し絡み合っており、また本来の人文科学研究の方法論は、元来このように細分化されるべきものではないが、しかしあくまで便宜的にそのように区分したほうが理解しやすいと考えるからである。

その上で、折口信夫旧蔵資料の現状を改めて記すと以下の通りとなる。

1、国文学の研究領域と創作領域については、折口信夫研究或は同時代文学の研究に資する資料として、第一次資料（自筆原稿、書き入れ原稿等、手帖、日記手控え、メモ、浄書原稿）と第二次資料（校正刷、抜刷、図書、雑誌、受取書簡、生活関連資料、教育関連資料、その他）に分けて整理を進め、自筆原稿、受取書簡のDBの骨格を整えたところである。

2、民俗学、宗教学領域については、上記の分類にはあてはまらない多くの資料の残存が確認されたことから、国文学領域の資料整理の手法とは若干異なった切り口で、「民俗学資料」としてひとまとめの形で分類、分析し、別方向のデータ番号を振って整理を行うことが必要と考える。それは、民俗学、宗教学領域には、折口と彼の教え子たちが複数関与する調査という実態があり、その報告書、記録などが存在するからである。

文学、創作という領域が、折口信夫（釈迢空）という個人の才能の開花とすれば、民俗学、宗教学領域は、もちろんそれとは無縁ではないが、より一層外部からの刺激や見聞、旅、歩行、調査などによってもたらされたものに所以するといつてもいいだろう。彼が、なにを見、なにを聞き、なにを調べ、なにを記録したか。そしてその弟子たちも、彼の元を巣立った後、折口に学んだ才能が地域の調査に赴かせ、時には折口と共に調査に入り、思考してまとめた報告書などが、多数存在するのである。

言ってみれば、そうした共同での調査や旅によってもたらされた折口信夫の知見や思考も、又多く存在するはずであろう。民俗学、宗教学という分野は、多数の現在性を帯びた外部との協働によって、折口の中に紡ぎ出されてきた思考ともいえるのである。

彼が、民俗学を補助学として、というのは、その謂もある。

これを念頭に、「折口信夫旧蔵資料」のうち民俗学・宗教学関連資料を分類すると以下のようになる。

1、民俗学調査報告書（折口が直接、間接に関わったもの、折口の弟子或は関係

者が関わった原資料、またはそれらの写し)。

- 2、折口信夫が関わった民俗学関係団体などの資料(國學院大學郷土研究会などの日誌、関係団体などから送られてきた資料、名簿等)。
- 3、祭、民俗芸能等に関わる同時代的資料(開催案内、次第、招待状、台本等)。
- 4、折口信夫宛書簡(特に民俗学関係者からの折口宛書簡)。
- 5、歌舞伎等のブロマイド、民俗写真(すでに折口古代研究所において整理済み)。
- 6、その他上記に含まれないもの。

以上は、科学研究費補助金(「折口信夫旧蔵資料の調査とその評価を通じた同時代文学の資料学的研究」、研究番号26370258、研究代表者:松本博明 2014年~2016年)を受けて進めてきた研究の成果のうち、民俗学関係の資料整理から明らかになったものである。

本稿は、そのうち折口信夫宛書簡(特に民俗学関係者からの折口宛書簡)の整理解説よって明らかになった事柄について、報告したい<sup>1)</sup>。

## 二 折口信夫旧蔵民俗学関係受取書簡

折口信夫受取書簡のうち、民俗学関係者からの書簡は多数認められる。だが、まだ全体のデータの整理が済んでいないため、その全体像を示すことがはばかられる。そこで本稿では、すでに整理が進んだ書簡から、特に興味深いものを取りあげたいと思う。最初に注目されるのは、次にあげる五名である。(数字は点数)

柳田国男 六十一通

ニコライ・ネフスキー 六通(うち妻イソ(磯子)からのもの二通)

中山太郎 二十一通

伊波普猷 二十五通(うち妻冬子からのもの二通)

早川孝太郎 二十一通

このうち柳田国男からの書簡については既に解説整理し発表している。彼を除く四名の民俗学者は、大正中頃から昭和の初期にかけて、折口信夫と深くかわった人物であり、またそれぞれ互いに深い関係をもちながら、日本の初期の民俗学を支えた人々である。

## ニコライ・ネフスキー

ニコライ・ネフスキーは、大正四年ロシアペテルブルグ大学の官費留学生として来日、二年間の予定で留学生生活を送ることになった。すでにロシアの官費留学生としてニコライ・コンラッドが東京帝国大学に留学して居り、またオートン・ローゼンベルグが仏教研究のために日本に滞在し研究を進めていた。この時期、日本とロシアは文化研究の分野で深い交流があった。

来日したネフスキーは、本郷春木町の吉川古書店を通じて知遇を得た中山太郎を通して折口信夫を知ることとなる。さらに折口、中山両氏は「面白いロシア人がある」として柳田国男に彼を引き合わせる。すぐに柳田が主宰する郷土会に参加するようになり、日本の古代文化を中心とした研究と調査に携わった<sup>2)</sup>。

ネフスキーと折口信夫とのかかわりは、中山を通じて大正四年ころから始まっている。折口の國學院での万葉集、源氏物語の講義を聞く。柳田を通じて日本文学を民俗学的に解明する手法を模索していた折口の文学講義は、ネフスキーにとって極めて新鮮であったと思われる。また折口にとっては、彼の万葉集講義を真剣に聞き、大正八年に刊行された『万葉集事典』を熱心に読み、その見解を真つ向から批判する異国人の存在に大きな刺激を受けていたことであろう。

二人の関係は、こうしたいきさつを結び上げながら、「水」という一点に集約されていったといつてよい。日本人の信仰、文化における「水」はいかなる存在価値をもつか、それは後に折口信夫が刊行する『古代研究』の中核をなす論文群「若水の話」「水の女」「ほうとする話―祭りの発生」において、日本人の信仰に水が果たす役割を、生と死の、魂復活の儀礼に不可欠な水の存在を実証しておく重要な道筋となった。次ページに掲げる書簡①は、その過程を示す上で重要な資料である。

ネフスキーは『万葉集辞典』に記述された折口の「をち水」は「支那思想からきたものか」とする見解を、琉球の事例をもって批判し、それが後に、折口を琉球探訪へと決意させたきっかけとなるわけである。

大正九年から十年にかけて、柳田国男が沖縄を訪れたことを契機に、折口信夫、中山太郎、ネフスキー、松本信広らを中心に南島談話会が発足、参会者にも沖縄探訪の機運が高まった。これをうけて、折口信夫は大正十年七月に第一回目の沖縄探訪を敢行、本島、久高島、津堅島、国頭地方などを調査して回った。追ってネフスキーは、大正十一年夏に宮古島を中心とした八重山地方を調査した。

ネフスキーからの書簡、現存するのは本文末尾【付載データ】表1に示す通り六通。最も古い書簡は、大正十四年二月十六日の消印をもつものである。

この書簡の重要なところは、八重山での調査を終えたネフスキーが、バカミズ（若水）に関しての指摘をしている箇所である。ここでは「万葉辞典によりますと「古くから恋水としてなみだと戯訓せられたものであるが・・・をちみづと読む」と有る。是はワカミズとワガミズとの戯訓ではありませんか？」とする箇所は、折口の『万葉集辞典』（大正八年一月 文會堂）の記述に対する批判的指摘である。さらに、宮古島での見聞を基に、琉球語と日本の古語との通行関係を「テダ」「カハ」「トラ」などを事例にあげて折口の見解を求めている。加えて、「宮古島の神子と祖神の祭」について書きたいと熱望し、そのためにのろの話聞かせてほしいと熱望している。ここに出てくる初谷旅館は、当時神田万世橋横にあった旅館で、この時の会合とは恐らく伊波普猷上京歓迎南島談話会ではなかったかと考えられる。

① 折口信夫宛 【大正十四年二月十六日】ID 42

拝啓、その後は誠に申訳のない御無沙汰をして居ります。如何お暮しで居らしますか？私はつまらなさや淋しさのお蔭でしばらく誰方へも通信せずに御無沙汰して居ります。

今日は兄様と話したくなつたから筆を取りました。さて去年の秋お目に掛かった節は宮古島のバカミズの事に就てお話ししたかと思ひます。万葉にある変若水はことに依ると、やはりをちみづと読まず、ワカミズと読んだかも知れません。お正月の若水の思想は日本にもありますが、宮古島のバカミズは伝説に依りますと立派な変若水であります。万葉辞典によりますと「古くから恋水としてなみだと戯訓せられたものであるが・・・をちみづと訓む」と有る。是はワカミズとワガミズとの戯訓ではありませんか？ご教示を乞ふ。

それから貴方の外は誰とも相談する事が出来ないから日本語の歴史的の evolution に就いて御意見を承はりたい。主に動詞の形（将然形等）、チェンバレン等の Gase に就いては一体どう云ふ学説があるかを承はりたい。

私の考へでは日本語（琉球語もその中に入る）の evolution は名詞から動詞へと云ふ風ではなかつたかと思ひます。動詞の色々の形は皆同語根の名詞ではなかつたらうか。色々の助詞等と agglutination して、名詞の意義を失つてから始めて動詞の觀念があらはれて来たのではなからうかと思はれます。将然形を名詞として使用

したとか云ふ学説はありませんか。琉球語の、ti:da, ti:da (太陽) は照るの将然形だと思ひます。那覇辺りでは今まで ti:da と言はずして ti:ra(n)云ふが、この ti:ra は御承知の通り ti:ra (照る) の将然形です。

日本語のかはは川の意味に使はれてゐますが、琉球では井の意味です。私の考へではかははかふ(飼う)の将然形で、即ち我々を養う者の意だと思ひます。同動詞の連用形はかひで、即ち貝(我々の食ふもの。宮古島の伊良部では食ふを「ま」と申します。そのまは何時でも日本語の「ま」に当ります)。

古日本人の主なる食物は貝であつたとの証拠は多数の貝塚だと思ひます。か、はは我々を養ふ物であるから、川にしても井にしてもさしつかへがないと思ひます。おもしろでは太陽の事もテルカハと歌つたのです。

それからマラ(陰茎)は梵語の mālā に関係のない言葉で、やはりマルと云ふ動詞の将然形だと思ひます。即ち分泌者とか云ふ意味であります。分泌されたものを連用形でマリと云ひました(ユマリ参照)

日本語の買ふと云ふ動詞は昔の物々交換の事を思ひ出させる。今まで物々交換の行はれてる所では買はんとする品物の上へ(即ち売物の上へ)持つてきた品物を置いて「如何ですか、此で行けるか」など云つて、行けなかつたら又品物を一つづゝ上へ加へます。だからかふの元の意は上へ置くとか上にするとか云ふ意だと思ひます。(カブル、カプセル等と同語根) 此のかふの将然形はかは(皮。木の皮、動物の皮など)即ち上にあるものだと存じます。売るの元の意は下に置くとか下にするとかであつて、将然形はウラ(裏)であります。

動詞の色々の形は各自の意味を有してゐたと思ひます。「テラ(太陽)とテリ(照)。マラとマリ。カハとカヒの区別」。

虎(トラ)も取るの将然形ではなかつたらうか。即ち我々を取る者の意か。鳥は同動詞の連用形、即ち我々の取るもの(護物)。洞(ホラ)と堀(ホリ)はホル(掘る)に関係がないでせうか。縄(ナハ)と綱とは確かに関係のある語だと思ひます。何卒御意見を述べて下さいまし。形の問題は今まで解決されてない様ですが非常に面白い問題です。

それから秋に申しあげました宮古の神子及び親神の祭りに就いて少し書いて見たいと思ひますから、あの晩、初谷旅館の前でお話しなすつた琉球ののろの話をもう一度お知らせして下さいませんか。伏してお願ひ致します。のろの子供が神を見て「お母様」呼んだ話等はどうも仔細をすっかり忘れてしまひましたから、何卒

御通知下さい。お待ちして居ります。

お手紙は余り長くなりましたから此で失礼致します。

皆様にも宜しく さよなら

二月十六日

ネフスキ 敬具

折口信夫様

侍史

② 折口信夫宛【昭和七年一月十八日】ID 2467

先日は御忙がしい処わざ／＼おいで願ひ誠に有がたう御座いました。私共はいろ／＼の都合上で二三日前に表記へ転宅致してまゐりました。もし御時間が御座いました節は何卒御立寄り遊ばして下さいませ。

玉川電車新町下車でございます。市内へ出ますのには大変不便になりましたけれど、当分子供相手に草いぢりでもいたしませうと存じて居ります。

先日も大体申し上げました通り、ネフスキの方からは一銭の送金も無く毎月父からの送金に依つて生活して「まゐりましたが、いかに父子の仲でも長い間毎月生活費を送っていたたく事はあまりに心苦しく思ひますし、又子供を連れて都会に住んで居りますと生活費以外にいろ／＼と御金もかゝりますので、仏像でも売つて生活費の足しに致し度いと存じまして御迷惑をおかけした様なわけで御座います。どうぞ何分よろしく御願ひ申し上げます。取急ぎ転宅の御知らせまで。かしこ

ネフスキ磯子

折口先生

ここに翻刻した二通と合わせて、ネフスキーからの折口に差し出された書簡は表1に示す通り全部で六通。

最後の二通は、妻イソから折口信夫に出された書簡である。昭和七（一九三二）年一月一八日の消印。昭和四（一九二九）先にソ連に単身帰国して居たネフスキーから仕送りがなく父親から援助を受けていることを吐露しその苦しい実状を訴える手紙である。

恐らく同じころ石浜純太郎あてにもイソから窮乏を訴える書簡が届いている。曰

はく

借りて居りましたお金の方も全部返金いたしましたから何卒御安心遊ばして下さいませ。店でもやつて居りますとその日暮しに困りませんでした。それからどうして生活して行くかを考へると本当に淋しくなります。今日ロシアからお手紙がまゐりましたが、ネフスキも病気で十一月二十六日から床についたきりで、非常に肺を悪くして、どうしても病院に入れられるでせうといつてまゐりました。私はどうにかなるまで当分お友達の処で御厄介になることにいたしました。<sup>6</sup>

ネフスキーは決して仕送りをしなかつたわけではなく、当時の日本と独立直後のソ連との決して良好ではない関係から、昭和七（一九三二）年十一月六日付、レニングラードのネフスキーからイソに出された書簡にはネフスキーが送金に苦心している様子が窺える。

そうした中、イソと二人娘のネリ（エレナ・ニコライウナ・ネフスカヤ）のソ連渡航が決まったのが昭和八（一九三三）年七月。折口信夫宛第二通目（ID 3883）は、それをうけて、七月五日の船でロシアに向かう事を折口に知らせるとともに、ネフスキーに何かことづてはないか、と問うたものである。

### 中山太郎

中山太郎と折口信夫との関係を端的に物語るのには、「民俗学」か「フォクロア」という学問のあり方の問題について、昭和の初期に折口と柳田とが並び立つような状況になった際、中山が折口と同じ方向を向いていたという点に尽きる。そのことは、昭和六年に柳田国男から折口に送られた書簡に如実に現れている。

柳田は、次のように書く。

民俗学第二の完成悦しく存候。この中にはまだ拝見せざりしものも有之潜心精読いたすべく候。尚奥の方の御添書を読みて頗る明かに意見の差を覚り申候。御説の如く小生は以前は固より今も折々はフォクロアを史学の方法として活用するこ

と有之。それがよきことであつたと今さへ感じをり候。単なるフォクロアよりも其方が国学の改革には有効に役立つべしとも存じをり。貴兄がさらに独自の方法を加添せらるゝも悦ばしく存じ候ことに候。唯一点だけは是非とも故障申入度はそれをフォクロアと称せらるゝことに候。

民俗学は新名なれば衆議次第何に適用しても可なれど少なくともフォクロアには既に定まつた意味有り。一言でいへば資料を書冊に採らず、純乎として民間の伝承を解説することに候。ゆえに小生等が巫女考等に書いた(中山君等が今もやつて居る)やり方をば曾て一度もフォクロアと呼びたること無之候。雑誌の英文は余計なことなれども会をフォクロアソサイテイと謂いつゝ紀伝解釈の仕事をして居られたのでは如何にも日本に外語の理解力が無いやうで、片端之に関係ありし小生は心苦しく候。(原文に適宜筆者が句読点を補った。傍線も筆者)

折口信夫の『古代研究』民俗学篇贈呈への礼状の形を取りながら、折口のいう「民俗学」(あるいは「日本民俗学」という語彙への違和感を吐露し、返す刀で中山太郎の書冊(文献)と伝承とを二つながら参照していこうとする歴史民俗学的立場をバツサリ切り捨てている。

この時期は、『民族』終刊後、発表の場を失つた人々のために、折口を中心として『日本民俗』『民俗学』が発行され、好むと好まざるとにかかわらず、折口が柳田に対抗するもうひとつの柱として認識される事態となつていた。なかでも中山は、「日本民俗学」という用語を積極的に使い、歴史民俗学を標榜して文献資料を積極的に活用して、民俗学の再構成を考えていたから、必然的に折口と中山の立場は近接していったといつてよい。

中山太郎は、報知新聞記者、博文館編集者など二十二年間の記者生活を経て、在野の研究者として民俗学の世界に登場した。もちろんそのきつかけは「郷土研究会」への参加であるが、その後この集会の参加者それぞれの交友を取り持つ結節点の役割を果たしたことは、斯界にとつて重要なことであつた。

折口信夫を柳田国男に紹介したのも中山太郎であつた。

中山太郎がその業績を多く世に問うた時期は、大正末年から昭和十一年ころまでで、その時期はまさに柳田国男を継ぐべき学究の綺羅星のごとく出現した時期である。その時期に『土俗私考』(大正十五年)から『日本盲人史(正・続)』(昭和九年・十一年)に到る主要著作が一気に刊行されている。そして、実にこの時期に

中山太郎から折口信夫への書簡が集中しているのである。

中山太郎から折口信夫にあてた書簡は、二十一通現存する。

その中で最も古いものは、大正六年二月四日、中山太郎宅を翌五日にネフスキーが訪れるので、おいでになりませんか、という誘いの手紙である。中山が折口とネフスキーをしきりに合せたがっていることがわかる。新聞記者、編集者という仕事を二十二年間続けた彼は、まさに優れた才能を引き合わせて、その会話の中で立ち上がってくる「新しい化学反応」を期待していたのではなからうか。

その後は、折口信夫は柳田国男を紹介された恩顧を忘れなかつたと見え、中山に刊行書籍を送っていたと見える。中山からは贈呈された書籍の御礼状が多い。(表2参照)

### 伊波普猷

伊波普猷は、明治九年那覇西村一四五番地(後に那覇市西本町)の素封家に生まれ、沖縄県尋常中学校、第三高等学校を経て、東京帝国大学文学部言語学専攻を卒業。沖縄中学校時代、皇典考究所(後の國學院大學)を出て沖縄に赴任していた国語教師田島利三郎との出会いが、彼の「おもしろそうし」との最初の出会いであつた。卒業後帰沖。沖縄の歴史研究をつづけ、明治四十四年それまで書き溜めた論文を『古琉球』として出版。柳田に贈られた一本が、伊波と柳田を結び付け、その後の沖縄研究の第一歩となつた。

柳田は『古琉球』に新たな沖縄研究の可能性を感じ、また「おもしろそうし」の存在をとおして沖縄と日本との言語、信仰、民俗の比較研究の重要性を見出したのである。柳田は大正十年一月、初めての沖縄旅行を敢行したが、その重要な目的の一つが伊波と面会し、彼の現状を憂い今後とも学問を進めることを強く勧めることであつた。一方折口は、柳田に遅れる事半年、大正十年七月に沖縄を旅するが、この時は伊波と面会できなかつた。しかし、伊波と折口との親交は、このうち終生続くことになる。

伊波は、大正十四年十二月、勤務していた沖縄県立図書館を退職して、交際していた同館司書真栄田マカト(後に結婚して伊波冬子)をともなつて上京。折口信夫への書簡はこの時期からのものが現存する。

折口博士記念古代研究所の所蔵されている伊波普猷の書簡のうち十六通について

は、『伊波普猷全集』第十巻に収録されている<sup>10</sup>。刊行に際して、岡野弘彦および当時研究所助手であった海老沢泰久によって整理され、同全集に収録されることが話題によって知れる<sup>11</sup>。しかし、その十六通以外にも、現存する書簡があり、再度筆者が整理し、又妻冬子からの書簡なども含めてデータとして整理したものが、巻末に掲載した二十五点である。(表3参照)

### 早川孝太郎

すでに周知のことではあるが、折口は、大正十五年一月、早川が同行して初めて三州設楽郡豊根村三島の花祭りを見学した。

その六年前の夏、松本での講演の帰り、美濃岩村から歩き始めて、三信遠の山村の生活を調査・実感しながら、苦勞の末新野にはいつたとき以来、折口はこの地域に調査に入ることを望んでいたことであつたから、早川の誘いは一つのきつかけに過ぎなかつたかもしれないが、いずれにせよ、早川が折口を三信遠にいだなつたことと変わりはしない。早川がみずからの故郷、北設楽郡に初めて「調査」に入ったのが、やはり大正九年の「田峰の地狂言」の調査であつたというから、奇縁なことではある。

早川から折口に宛てた書簡で現存する最も古いものは、大正十四年六月一日の消印を持つものである。「飛島本間莊太郎商店」発行の「飛島風景 盲島」の絵葉書を使用、山形県飛島勝浦から差し出されたもので、探訪地到着の報告である。前日に飛島に到着したこと、山も家も想像以上に立派であることを記しながら、記録類が何一つ残されていないことを嘆いている。

『炉辺叢書』の一編として『羽後飛島図誌』が刊行されるのは、この四ヶ月後の十月三十一日のことである。

この後の折口宛て書簡(名刺や鑑賞券送付状なども含む)を列挙すると以下のようになる。

大正十五年一月一日

(巢鴨局消印) 賀状

昭和二年二月六日頃

(愛知本郷?) 三河からの報告・帰京後の訪問予告 「三河の山の旅も今日で二十日」

昭和二年九月

昭和三年 月

昭和三年十二月二十四日

(巢鴨) 帰京報告・訪問予告  
花祭りへの出立の知らせ。五日后十時四十分東京発―初見の花祭り―中在所あたりで一緒になれると好都合に存じます。

過日は色々と有難御礼申し上げます。以前花祭りの会を致しました折、宮本様から借り出した衣装のこと、飛んだ迷惑をかけて何とも申し訳なく・・・

(不明) 振興大和絵会優待券多数。

(消印不明) 「古代研究」民俗学篇I 献本に対する御礼

(巢鴨) (封書) 同国文学篇献本に対する御礼

(巢鴨) 病気の見舞い・旅行の予告・帰京後の訪問予告

(巢鴨) 年賀欠札

(愛知津具) 三河からの報告・帰京後の訪問予告

(巢鴨) 訪問予告 「アティックの絵葉書御送り申しました」

(巢鴨) 訪問予告 「最早旅行よりお帰りになりましたでせうか。藤木君から手紙・例の八条実記の写本文が欲しいようすがご都合お伺いします。」

(巢鴨) 賀状

(仙台) 仙台からの報告・佐々木喜善添え書き

(巢鴨) 賀状

(豊島) 賀状

(豊島) 賀状

(豊島) 賀状

(豊島) 賀状

(豊島) その後佐々木喜善さんの御遺族の方のことはどうなつてゐるのでせうか

(名刺書き入れ)

(那覇) 那覇からの報告 「十八日にかごしまを立ち今朝八時那覇につき申候」

(落合長崎) 賀状

(落合長崎) 賀状

(落合長崎) 賀状

(茨城内原) 「たぶん東京へ出ますので今度こそ御邪魔申すつもりです」

昭和二年の二通は連続して出されたもの。最初のは「三河設楽郡の在所にて」とあり、二十日ばかりの山の旅に少しさびしくなったからそろそろ帰京したいといい、月半ば頃に折口の処へ何うと記している。二通目は帰京後の投函で、さっそく田楽のことを伺いにいくと記している。

昭和四年は三通。うち二通は『古代研究』献本に対する礼状。

八月九日消印の一通は、病気の見舞いを述べ、急遽三河へ赴くことになったから、帰京次第教えを乞いたい旨記している。折口は、この病気のために伊波普猷と同行する予定だった沖繩採訪を中止している。

昭和五年は四通。この年が最も多い。この年の四月、早川は原著『花祭』を刊行し、更なる調査を続けていた。

五月二十一日消印の葉書は、菊屋商店発行の「三川本郷風景 与良木峠より見たる本郷町万場及下川村市場」の絵葉書を使用。やはり設楽郡からのもので、西・東西菌目を歩いていること、帰京したらまた何うつもりであることなどが記されている。

これに先立つ四月二十二日と五月三日に、折口が中心になって「西浦の田楽」と「新野の雪祭り」とをそれぞれ国学院大学の講堂で実演している。また渋沢邸でも仲在家の花祭りが実演され盛会だったという。これらの実演に早川が関わっている事は言うまでもあるまい。

これらに実演は学術的なものであったが、こうした民俗芸能の実演については、早川は後年「第九回郷土舞踊大会」を組上に上げ、「感想二三」と題して批判的な立場を披露している（「旅と伝説」八巻五号・昭和十年五月）。渋沢や折口によって実現した花祭り、田楽、そして雪祭りの実演を、早川はどんな思いでプロデュースしたのであるうか。

八月十二日消印の葉書には、何おうと思いいながらそれがかなわなかった非礼を詫びた後、アチックが作成した絵葉書を送ったこと、三河にお誘いしようと思ったが打ち合わせがうまくいかなかったので計画をしなかったこと、また改めて伺ってお話ししたいことなどが記されている。

九月八日消印の葉書は、「三河北設楽郡本郷町 おんけ（紡桶）」の絵葉書を使用。これは、前便にあったように、前年にアチックミュージアムによって収集せられた北設楽の民具を、絵葉書に仕立てたものらしい。

この葉書が留守宅に届いた頃、折口は、柳田への遠慮もあって永年足を踏み入れ

なかった遠野から、上下閉伊郡、上北三八、下北地方を採訪して歩いていた。八月二十九日から歩き始めて、九月十三日に盛岡にはいつているから、ほぼ半月間の旅で、東京に戻ったのは十五日頃と考えられる。早川もこの旅を知っていたらしく、「旅より御帰りになりましたでせうか」とはじめて、大阪の藤木氏（藤木喜久麿）から生活に不自由しているという手紙が来たこと、「八丈実記」の写本が欲しいよいうなので、そのうち伺いますから御都合をお伺いしたい旨記している。

昭和六年は二通。六月九日消印の葉書は仙台から。「桜ヶ丘公園の緑影」と題する絵葉書を使用。ひよっこりと早川が尋ねてきたので面食らったが、二人で緑の中を歩いたら元気になった、という佐々木喜善の添え書きが付されている。早川はいえ、採訪地の飛島を出て津軽を回って仙台に着いたこと、昨晩は折口の噂話をしながら夜をあかしたこと、明日東京に向かうことが記されている。『羽後飛島図誌』が刊行されて八年、早川にとつて久しぶりの飛島であったわけだが、この時の旅の印象は、翌月「島の生活——ふたたび羽後飛島に渡って」（『旅と伝説』四巻十号）として発表されている。

その後、折口への私信は、賀状以外に目立ったものが無くなる。

昭和八年十一月十一日、早川は九州帝国大学農学部研究室へ赴任するために、東京駅から西下する車中であつた。いきおい、信濃入りも中断され、それに伴って、折口への私信も少なくなっているようだ。

昭和九年八月二十日、上京した早川は、折口を訪ねるが、折口は七月のはじめから藤井春洋の病を養うために北軽井沢に滞在しており、会うことはできなかった。

昭和十年九月二十日、九州一円、南方諸島の調査に着手していた早川は、採訪地那覇から葉書を出している。アサヒ写真館発行の「バナナと田舎風景」（琉球）の絵葉書を使用。そこには、急に思い立って何の準備もなく十八日に鹿児島を立つて今朝那覇に着いたこと、島袋源一郎に会うつもりであること、図書館で島袋源八さんに会ったら折口がこの冬に琉球に来ることを聞いたこと、船を待つて八重山へ渡る予定であることが記されている。

現存する書簡を通観して言えることは、旅先からの書簡が多いこと、しかも旅先で何かを見聞すると必ず帰京後に折口を訪ねて報告し、教示を求めている形跡が見られることである。特にそれは、早川が九州に赴く前に顕著である。残された書簡が、早川から折口に宛てた書簡のすべてとは言えないから、安易な判断はできないが、一つの傾向として認められるだろう。

柳田の学問から出発して、渋沢のアチックに入り、実地の学として「もの」にかたらせる方向に進んでいる早川が、花祭りや田楽の論に見られる構造分析、思考の方法などに関しては極めて折口に親和している側面は、こうした書簡のありよう等からも垣間見られるのではあるまいか。

注

(1) もちろん本稿で取り上げたもの以外にも多数の来翰があるが、まだ全面的解読と整理が終わっていない。今後整理がすすむにつれて発表できる状態になると思われる。また受取書簡データベースが完成すればすべて検索可能な形で公開される予定である。

(2) 拙著『折口信夫の生成』（おうふう、二〇一五年三月、二七三〜二九〇頁）中山太郎『校註諸国風俗問状答』（東洋堂、昭和十七年）及び「若水の話」

(3) 『古代研究』民俗学篇、昭和五年）。中山の本の自序には、「本書を先ず異郷の学友 ニコライ・ネフスキー氏にお目にかけて」と書かれている。

(4) 柳田国男は「大白神考」の中で「始めてネフスキー君が訪ねて来てくれたのは、たしか大正四年の秋の頃であった。其次の年には彼の二十五の誕生日に、呼ばれて駒込の家に行つたことを記憶して居る。乃ち私よりも十六ばかり若かつたのである。其頃の日記を出して見ると、我々のこしらへて居た幾つかの集會に、彼の出て来なかつたのは稀であり、又旅行にもよく同行した。」と記している。

(5) この書簡については、昭和七年一月十八日ネフスキーの妻磯子からの書簡とともに、加藤九祚『天の蛇』（河出書房新社、昭和五十一年）のあとがきに翻刻されているが、折口信夫とネフスキーのかかわりを考える上で極めて重要な書簡であることから、ここに改めて翻刻しておく。

(6) 「ネフスキー文書」石浜純太郎宛ネフスキー・磯子書簡。  
昭和五年六月二十九日折口信夫宛て柳田国男書簡。『柳田国男事典』（勉誠出版、平成十年七月）巻頭に写真と翻刻を掲載してある。

(7) 田島利三郎は、皇典講究所在学中に琉球語によって記された文書に出会い、その研究を志して渡沖。沖繩中学校教師をしながら研究を続けた。明治二十七年沖繩県庁所蔵の資料の中から「おもろそうし」二十二巻を発見、その研究に着手するが、在職する中学校校長との対立から免職処分を受け、

帰京した。その後研究成果を発表するなどしたが、明治三十六年伊波が東京帝国大学在学中、田島は彼を訪ね、それまでの研究資料を伊波に託し今後の研究を約束させた。

(9) 『古琉球』は明治四十四年十二月に沖繩公論社から出版された。跋文は川上肇。その後数度再版、改定版が刊行された。

(10) 『伊波普猷全集』第十巻（平凡社、昭和五十一年三月）四五三〜四六二頁。前掲注（9）解題。

(11) 本章段（早川孝太郎）は折口博士記念古代研究所『折口信夫資料だより』第一号に掲載した文章を、その後の整理分析を踏まえて改稿している。

【付記】本稿は、科学研究費補助金（「折口信夫旧蔵資料の調査とその評価を通じた同時代文学の資料学的研究」、研究番号26370258、研究代表者：松本博明 2014年〜2016年）を受けて進めてきた研究成果の一部である。

## About the important letters which Shinobu Orikuchi received during the lifetime -The people who gathered around Nicolai Nevsky-

Hiroaki MATSUMOTO

Non-rearranging to be related to Shinobu Orikuchi, a document of non-decoding exist in large quantities. When I participated in new publication "complete works of Shinobu Orikuchi" publication, the writer reprinted it with the rearranging of some documents including the draft document, and most of result were recorded in the complete works as a new document.

There are many things which became clear from folklore-affiliated document rearranging among the result of the study that I receive Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology science research funds subsidy and pushed forward and, about such an unfiled document, exists for 2014 through 3.

I want to report the fact that became clear the rearranging decoding of the letter (letter to Orikuchi from persons concerned with folklore in particular) to Shinobu Orikuchi particularly Nicolai Nevsky, Taro Nakayama, Fuyu Iha, Kotaro Hayakawa.

【付載データ】

本データは、平成30年1月20日段階における書簡データベースから抜き出したものである。「内容」は概略。

ID	形態	受取年	消印日付	差出人	内容
42		大正14年	2月16日	ネフスキー	宮古島のバカ水のこと。琉球語との比較のこと御願ひ。
550		昭和4年	1月1日	ネフスキー	賀状
1496		昭和5年	1月1日	ネフスキー	賀状
2437		昭和7年		ネフスキー	年賀
2467		昭和7年	1月18日	ネフスキー磯子	先日は御忙しい処わざわざおいで願ひ…転居通知。ネフスキーの方からは一銭の送金もなく毎月父からの送金に依って…。
3883		昭和8年	7月1日	ネフスキー磯子	今度ロシヤへ行くことになりましてこの五日の晩の五時二十五分まで出発いたす様になりました。何かネフスキーへ申上げることも御座いませうか。

表1：折口信夫宛ネフスキー・磯子書簡

ID	形態	受取年	消印日付	差出人	内容
11	葉書	大正6年	12月4日	中山太郎	明五日午後六時ネフスキー氏来宅の事、お誘い。
		大正13年	2月28日	中山太郎	請求書（永楽倶楽部）
36		大正13年	7月20日	中山太郎	内容欠
65		大正14年	5月17日	中山太郎	修善寺より
100		大正14年	7月28日	金田一中山	研究会創立会案内。八月五日午後六時、永楽クラブ返用いず。
120		昭和2年	11月27日	中山太郎	上半分欠…日光を送って…。
175		昭和3年	8月27日	中山太郎	能登よりの御端書…三社神社への紹介状依頼。
193		昭和3年	9月21日	中山太郎	上半分欠。…失礼仕候。…見たら民俗芸術の…が参ってゐました。
215		昭和3年	11月6日	中山三郎	以後も益々御教導…出土高麗劔？写真同封。
840		昭和4年	1月(不明)	中山太郎	漸く田村太夫の遺族発見訪問致しましたが精々「民俗」巻回書く位のものです。
983		昭和4年	4月14日	中山太郎	先日には御大切なる「沓岐の採訪帖」御送り被下…。佐藤氏入学の件御配慮頂き…。
1631		昭和5年	1月29日	中山太郎	春のことぶれ 御礼…。
1725		昭和5年	6月5日	中山太郎	潮来だより。
2103		昭和6年	2月10日	中山太郎	御風信拝見…御都合のヨロシイ日時にどこかで落ち合う事と致します。折返し御指図願。
2416		昭和6年	12月25日	中山太郎	頼田嶋一「仙魚集」もらってやってください。
2650		昭和7年	6月15日	中山太郎	故郷より。
2669		昭和7年	6月30日	中山太郎	来月二日の「民俗学大会」に柳田先生の御講演を拝聴に往くことが出来ぬのです。
2832		昭和7年	12月8日	中山太郎	御風信及び色紙御礼。
4155		昭和9年	2月24日	中山太郎	「曙覧の研究」御礼。曙覧の歌に対する感想など。先達の「郷土会」中座失礼。あのアイヌの長口上—。
4210		昭和9年	5月19日	中山太郎	西角井氏の立派な本が出版されましたので出版記念会を開催したと思います…。
4429		昭和9年	11月1日	中山太郎	当道関係の書類拝借被閱致し度。御都合の日時御知らせをう。

表2：折口信夫宛中山太郎書簡

ID	伊波全集番号	形態	受取年	消印日付	差出人	内容抄録
75	1	葉書	大正14年	6月25日	伊波普猷	御本は今朝改造社から…御礼…小林代から 思う選釈を注文…おくらせるように…。
	2	葉書	大正14年	9月4日	伊波普猶	昨夜はわざわざ三谷君お使ひ下され…啓明会の 講演が済んだらお伺ひしようと…真境君から書 面、万葉中のことばを琉球語と比較した のができたさうです。
118	3	葉書	大正14年	9月8日	伊波普猷	先日は御迷惑でした…私は啓明会へ…御気分は どうですか。私の所へ行く略図を書いて置きま しょう。
67	4	封書	昭和3年	5月21日	伊波普猷	琉球戯曲集組みはじめました。辞書はとりや め。序文はやめいお願ひ。辞書は郷土研究社で も。岡村君に話してみして下さい。来春北米に 行くかもしれない云々。
181	5	葉書	昭和3年	9月10日	伊波普猷	御序文はどうでせうか…刷上るのは十月の中頃 です。
796	6	葉書	昭和4年	1月7日	伊波普猷	謹賀 メキシコ日より 十六日桑港発帰国。
851	7	封書	昭和4年	2月2日 (1月25日書)	伊波普猷	二月一日横浜着の予(定)。おみやげには FrazerのMagic Art and Evolution of Kings
966			昭和4年	4月9日	伊波普猷 他	似顔絵。寄せ書。
1014	8	葉書	昭和4年	4月22日	伊波普猷	「古代研究」恵与御礼。
1124	9	封書	昭和4年	5月28日	伊波普猷	古代研究贈恵御礼。
1127		葉書	昭和4年	5月30日	伊波普猷	琉球戯曲集の広告文を書いてくれとのこと ですが、自分では書きにくいので君に御依頼願 いしようと思ひますが。
1222	10	絵葉書	昭和4年	7月2日	伊波普猷	なるべく早く書いて下さい…。
1227			昭和4年	7月4日	伊波普猷	書面欠。
1246	11	封書	昭和4年	7月14日	伊波普猷	序文をお書き下さったさうで厚く御礼…廿三日 に立つ積もりですからあなたも是非一緒に。
1276		葉書	昭和4年	7月26日	伊波普猷	往復の旅費丈用意されたいと思ひます。
1318	12	電報	昭和4年	8月4日	イハ(伊波普猷)	ダイカンゲイジユンビ…(不明)…ライユウヲ コフ
1637	14	封書	昭和5年	2月9日	伊波普猷	(英文)
1825	13	封書	昭和5年	8月28日	伊波普猷	藤田が就職の件につき御願ひにまゐります。 ついでに琉球国由来記…拝借。
2145			昭和6年	3月19日	伊波普猷	
4508	15	封書	昭和10年	12月26日	伊波普猷	うるま即ちのろまの島三度目の印象如何です か。仲宗根君其他の人に依頼状を出しておきま した…重武翁もきいていらっしやい。火の神考 は「宗教研究」で発表することにします…。
72	16	封書	昭和12年	3月3日	伊波普猷	短歌文学全集御礼。「をなり神の島」結論未 だ。「あまみや考」のこと。
503		葉書	昭和17年	10月28日	伊波普猷	天地に宣る御礼。
658		葉書	昭和18年	12月13日	伊波普猷	死者の書御礼。
270		葉書	昭和23年	5月6日	伊波冬子	芸術院受賞御慶び。尻無法さんと二人でお伺 ひさせて頂きたいと存じます。比嘉春潮氏葉書開 封(先生原稿のこと)
1378		封書	昭和26年		伊波冬子	先日はお忙しいところ御邪魔申上げ…あの本を がらくたと一緒に納屋に置いて行くのも気が とりで先生にお収めになって頂きたく願ひ申上 げます(その他)本は二十日までに運送屋にお 届けさせます。

表3：折口信夫宛伊波普猷書簡